

防大卒業生の務め

——われわれは榎校長なき今、何をなすべきか——

平 間 洋 一

われわれの連帯感の表徴であり、精神的支柱であった校長死去の悲報は、中南米方面一二三日の遠洋航海を無事終了、懐かしき母港へ後二五哩の大島東方海上を北上中の練習艦隊にもたらされた。

それは白亜の防大がそろそろ山上に見え始める頃であった。

葬儀にともなう練習艦隊の帰国行事の変更、司令官及び乗組の防大卒業生の弔電発信、香典集金、葬儀出席代表の決定と久し振りに祖国の山河を見る感慨にひたり、校長の面影を偲ぶ間もなく艦隊は横須賀港外へと投錨した。

明くれば寸暇もない行事の連続、葬儀にも初七日にも出席できぬまま、艦隊は東京方面の諸行事を終了、呉へと向かった。

左右にローリングするキャビンに終日もり、十数年前の久里浜

のこと、小原台のことを想い浮べ、柔らかな中にも時々光る鋭い眼光、強い信念、外柔内剛のあの校長の面影を、われわれに対する限りない愛情と希望を偲びつつ訓示録「防衛の務め」を静かに、そして大きな悲嘆のうちに読みふけた。

さて、残されたわれわれは、ただ悲しみ、嘆き、想い出だけにふけるべきであろうか。

校長十年の在職中、確かに防大の伝統はある程度確立された。しかし、長い年月の内には数々の試験、変化もあり、防大の伝統がそれを乗り越えるまでに成長しているか否かは未だ疑問である。

われわれ卒業生は、校長の御薫陶を直接受けた幸運を感謝すると

ともに、防大に対する校長の数々の夢を、理想を後輩に、いや陸・海・空の三自衛隊に広め深めることが「われわれの務め」ではないだろうか。

それには、「これはですね」のマキ調で学生に、あるいは卒業生に語られた校長の訓話、即ち防大生のバイブルでもある「訓示録」「防衛の務め」を折に触れて読み返えし、自戒自律、積極自主、規律と服従等「マキイズム」とも呼ばれる校長の教えを思い起こし、次の事項を防大出身幹部の一致した考え方、思想として伝統としてこの機会に確立したいと思うのである。

一、強い正義を堅持し国民の信頼を得よう

レジャーだ、セックスだと世はまさに昭和元祿と呼ばれる泰平ムード。そこには理想を追い、未来を夢みる情熱も国家公共に対する関心もなく、ただ自己の快楽を求めて止まぬ小市民的気風が多くの国民を支配している。

これら上は役得、下はゴネ得の社会にあって、国民は自衛隊に何を望み、また、われわれは国民に何を示すべきであろうか。

「愛される自衛隊」という言葉があるが、私はこの言葉を好かない。国の平和と独立を守るわれわれが、唯、女のように愛され、また親しまれるだけで良いであろうか。われわれが求めなければならぬものは、愛ではなく、国民からの信頼であり、敬愛でなければならぬ。それは校長が何回となく強調された誠実で、信頼に値する自衛官となることであり、公私の別を明確にし、役得、汚職等の不正を徹底的に戒め、強い正義感に支えられた自衛隊独自の清潔感を保つことである。

これは自衛隊に対する信頼の側面から大きく高め、しかもこの信頼は十分に敬意の念が加わり得ることにおいて、その意義は大きい。

「諸君はまず国民の期待と信頼にそむいてはならないとわれわれは考えます。」

われわれは、諸君が正邪の判断のつく、また自分の行為に対して責任の持てる人として応待します。

『偽るな、欺すな、盗むな』との標語は米国土官学校の学生が、その名誉にかけて守り抜くと聞き及びます。

このことの守れぬものが、どうして国民は信頼することができませんか。

国民の信頼にそむかぬ道に東西はありません。

わが防衛大学の学生、また、国民の信頼を裏切らぬことを、その名誉にかけ、勇気をもって守らねばなりません。」

(修業の生活とその務め 三期生入校式)

「正直であることは、信頼の始まりであって、人ひとりの適性であることはもとより、特に国防の任務については、この資質なくしてこれを委せることはできないのであります。」

嘘があり、偽りがあり、ごまかしや、いい逃れは許せない。

これがここに学ぶ者の毎日の信条であり、反省でなければなりません。

寛容寛大は美德とされています。しかし、事、正直については、この寛容寛大にもきびしい限界があって、この点においては互に勵

まし戒むること金鉄の心を抱かねばならぬのであります。

(心の鍛練と行為の規範 開校一〇周年記念式)

「本校の特色を求めるならば、それは使命に対する誠実であって、屈託なき人間味溢るる生活のうちにも、事、誠実に関してはきびしさを持って襟を正すことであります。

われわれは、個人の自由と自発心を尊ぶものでありますが、これは決して放縦や気ままを意味するものではなく、自由発自心の尊いのは、正しいことをなし、これを主張し、行なうにあたって屈せざるの気迫を持つことにあるのであります。

この意味での自由発心は力でありませぬ。

本校の使命である防衛に対する誠実も、また高い意味の自由自発に発するもので、これは各人個々の意見であり、見識であり、また主義主張でなければなりません。

(全体への忠誠と個人 六期生入校式)

二、民主主義の本質を深く理解し統制に服そう

七〇年問題に端を発した大学紛争は、自衛官の入学拒否に発展、次は自衛官の子弟の入学拒否へとエスカレートしないと誰が保証できよう。

国内の左右思想の対立は軍事を政争の具とし、消極的国防政策と国防に対する認識と理解の欠如は、誇りと責任感を弱め、士気の高揚を直接間接に妨げて来た。

しかし、税金虫とか、税金泥棒といわれた防大創設当時に比べれ

ば、曲りなりにも支持率は八〇%台へと除々にではあるが着実に延び続けて来た。

某左翼のリーダーの言を借りるなら「われわれがとやかくいっている間に、あくまで腰を低くして徹底した忍耐力と誠意をもって努力している自衛隊に、そのバック・グラウンド、土性骨を見たような気がする」という忍耐であり、ただひたむきに国民の理解を、支持を得ようと務めた過去十数年の労苦、誠実な献身の成果であろう。さて、今後変動を見たとしても自衛隊が少なくとも主動的に、政治へ介入することは何人も予想しないであろう。しかし、流動変動を統ける政治情勢は、国内の政治的対立を極度に激化させ、外部からの働らきかけが自衛隊に波及する可能性なしとはいえない。

第一次大戦末期のキール軍港におけるドイツ水兵の反乱、ロシア革命の口火ともなった戦艦オリョール号のクレムリン砲撃等、武力を持つ軍隊の動向による影響は大きく、自衛隊への内外からの働らきかくはますます増大するであろう。このような時こそ、自衛隊があくまで政治的に厳正中立な立場を堅持し、厳然と存在する意義は大きい。

そしてこれは校長の教えられる民主主義への深い理解、思想の健全性及び公正なる内部統制、厳格なる服従により可能となる。

特に統制無視による「突き上げ」の影響は極めて大きく、この点に関しわれわれ強い道義性、伝統を持つべきであると思う。

「第一に諸君の任務は偏することなき均衡のとれた人物を要求していること、第二に諸君の任務は民主制度に対して的確な理解を要求していることであります。

(均衡のとれた人、民主主義を理解する人 一期生入校式)

「規律なくして真の自由なく、遵法精進した正義に服従する意思なくして真の民主主義は成立しません。」

命令服従の關係が合理的に成立した時に民主主義が実現されたといふべきでありましょう。

(均衡のとれた人、民主主義を理解する人 一期入校式)

いかなる組織も必ずその目標達成のために存在します。その目的達成に必要な統制並びに慣行に従うことは、いかなる組織においてもその存在のため欠くことはできません。

まして防衛を使命とする自衛隊が、この点に厳正であるべきはいうを待たないところであり、これあって初めて組織に生命が生じ、意義ある行動が可能となり、その正確と敏速が全うされるのであります。

ここにきびしい統制と規則の遵守があり、また、はげしい訓練の行なわれる理由があるのであります。

(防衛組織と個人 二期生入校式)

三、幅広い常識を養い、ジャーナリズム、

学者にまどわされない判断力を持つよう

学者、記者、医者、芸者、役者を封建五者という。一見、進歩的に見えるこれらの職業に従事する者の内部關係が意外と古い矛盾をついた言葉であらう。

さて全ヨーロッパの大学数より多い大学があり、三万近い教授を

養う文化国家日本で、これら^ががその名を認められるにはテレビに出て「ガラクタール(ガラクタではない)はお子様達の脳を働かせる……」と行くか、社会を騒がせた精神異常者金喜娯を民族問題に結びつけるオッチョコチョイになるか、さらに格調高く売り込むには政府の施策を総て批判し、総てに反対、理由は後から考え、世論が動きそうな方向に先廻りして騒ぎ立てれば名が売れて一流の学者になれる。

新聞は自衛隊を論ずるに支持率八〇%と反対五%の主張に紙面を同等に割く。

さて、戦前の京大はどちらかといえば、日本を動かす官僚界を東大に押えられ、次男坊的フアイトを反政府色に求め、美濃部博士論ずるところの天皇機関説を展開、東大は南進論、北進論と大東亜共栄圏をやっていた。

しかし、戦後東大がいち早く取舵反転、左傾し京大の分野に進出するや、京大は面舵反転人文学教室を中心に、安保、防衛問題に政府的議論を展開、ジャーナリズムにもはやされている。

太平洋戦争中、東大の御用学者の講演を純心な学生に聞かせるのは危険だと兵学校々長井上大将が断わったという話しを文春二月号で読んだ。

国をあやまるものは学者であり、評論家ウオルター・リップマンの言を借りるなら「デモクラシーの病」と名づけられた危険な世論、感情によって動かされる無知の大衆の圧力であり、それにおもねるジャーナリズムである。

このような乱れた時代に生きるわれわれとしては、ジャーナリズム、学者にまどわされぬ深い見識を養うとともに、短兵急に事態の

憶せねばなりません。

諸君は血族結婚がいかに害悪を残し、また組織の中のインブリーディングがいかに宿弊の因子をまくものなるかを聞き及んでいてありましょう。

もし、われわれの同窓同学に価値があり、その団結が尊いものであるためには、この弊風を決して許さぬという一点こそ、力を注がねばなりません。

きびしくこの心の掟を守る限り、同窓同学は他の尊敬すべからず得るでありましょう。これを誇りとし、これを口にしてはばかることなく、ためらう要なき寡黙気は必ずや自然のうちに湧き起ると考え

ます。

(同窓同学の意義 開校六周年記念式)

とりとめのないことを書きまくったが、上記四項目については、この機会にわれわれ大いに議論し賛同を得て、一つの伝統としていと思う。ご意見を得られれば幸甚である。

わが人生第二の父、心の支柱であり、勇気の根源であった校長のご冥福を哀心より祈るとともに、校長の意を体し信頼に値する立派な自衛官へと成長することをここに誓いたい。

(一期生 海上)